Osaka University Knowledge Archive

Title	場所的広場の成立と展開に関する比較都市論的考察
Author(s)	加藤, 晃規
Citation	大阪大学, 1985, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1170
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【16】

氏名・（本籍）	加藤晃規（かとうあきのり）
学位の種類	工学博士
学位記番号	第 6905 号
学位授与の日付	昭和60年 4月26日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**場所的広場の成立と展開に関する比較都市論的考察**
論文審査委員	（主査）教授 上田 篤 教授 紙野 桂人　教授 末石冨太郎

論文内容の要旨

本論文は，場所的広場という新しい概念を導入することにより，広場の発生と展開を比較都市論的に明らかにし，現代都市に対応する広場の創出手法を検討したもので，序章と本編4部13章よりなる。

序章では，建築的広場と場所的広場の概念を人間の行動と空間の構成原理から明らかにしている。

第1章では，ヨーロッパ古典古代の広場「アゴラ」についてその発生およびプランの方形化の構造を述べ，場所的広場としての初期アゴラが建築的広場としてのローマンアゴラへ変容することを示している。

第2章では，イタリアの広場をとりあげ，都市との関連の下に，自然発生的な中世広場が人工的なルネッサンス広場およびバロック広場へと変容する過程を述べている。

第3章では，日本の広場をとりあげ，それが農村に現出した共同体型のものと，都市に現出した自由空間型のものに分類されること，および日本の場所的広場の典型に鎮守の森が抽出されることを示している。

第4章では，中部イタリアの丘上都市をとりあげ，都市の中心に教会前広場があり，都市の積層住居群が広場を構成する枠組みであることを実地調査によって見出している。

第5章では，北部イタリアの平地集落の集落構成をとりあげ，集落の中心に教会前広場があり，それに対応して住居の型も変化することを示している。

第6章では，イタリアからブラジルへの移民の移住過程で形成された住居と社会について述べ，母国住居との比較から要素的なものが受け継がれる一方，枠組み的なものが変化したこと，および，社会的コミュニケーションがカッペッラを中心に展開したことを多くの事例によって実証している。

第７章では，この伊系移民都市の教会前広場の変容を分析し，母国の状況と比較することにより，環境変化にもかかわらず教会前広場の中心性と不易性が見られることを示している。

第８章では，草津市の事例から都市における鎮守の森について，平面的広がり，立地地形，周辺土地利用現況などの観点から分類し，その結果，小規模なものが多いこと，市街化のなかで伝統的価値が徐々に失われつつあることを考察している。

第９章では，名古屋市の事例から戦後の高度経済成長期の過程で伝統的景観を維持しえた神社境内地が非常に少ないこと，およびその空間変容を移動変容型，敷地形状改変型，空間改変型，参道改変型，維持型の５タイプに分類できることを示している。

第１０章では，それらの管理運営について述べ，とくに小規模境内地の整備対策が必要であることを示している。

第１１章では，ブラジルの日系移民都市に神社が勧請されなかったこと，および移住地の発展過程で核的施設が小学校から教会へと変化したことを示している。

第１２章では，以上の結果を総合比較し，建築的広場の原型として場所的広場が位置づけられること，および場所的広場の成立要件として Asyl 性が指摘できることを結論している。

第１３章では，場所的広場の展望を述べ，伝統的価値をもつコミュニティ広場の整備を提案し，Asyl 性を具有する場所的広場の実現可能性を検討している。

論文の審査結果の要旨

本論文は，比較都市工学的研究方法を用いて，都市の環境計画においてきわめて重要と考えられる戸外の共同体的生活空間のあり方に関する一連の研究結果をまとめたもので，その主要な成果を要約すると次のとおりである。

(1) 西欧の広場は，一般にイタリアにおいて顕著な展開がみられ，ルネッサンス期およびバロック期に，中世都市に形成された共同体的利用を目的とする戸外の生活空間を基礎に，ヨーロッパ古典古代の広場の影響を受けて成立したものであることを整理している。

(2) 中世に成立したイタリアの丘上都市においては，都市の積層住居群を枠組みとして，共同体的利用を目的とする戸外の生活空間が教会前に形成されていることを，文献および実地調査によって明らかにしている。

(3) ブラジルに形成されつつあるイタリア系移民都市においては，Cappella（小礼拝堂）を核として，その周辺に，共同体的利用を目的とする戸外の生活空間が形成されていることを実地調査によって見出している。

(4) 日本の都市および農村集落においては，産土神等の社前に，鎮守の森を結界として，共同体的利用を目的とする戸外の生活空間が形成されていることを実地調査によって見出している。

(5) 以上の三つの戸外の生活空間は，広場の原型とされる初期アゴラの平担空地に類似して，場所の平

和と無縁とを保証するAsyl性が認められることを論じている。さらにそれらのAsyl性を有する空間には，平担空地に構造物が建つことで成立する建築的Asyl，特定の自然的または社会的特徴によって成立する自然的Asylまたは社会的Asylの各類型に整理できることを示し，Paul Zuckerが明らかにしたAmorphous広場概念を補強する場所的広場理論を提出している。

以上のように，本論文は場所的広場に関する基礎的諸問題を解明し，西欧に発達した広場概念を拡張する多くの新しい学術的な知見を加え，広場理論の進展に貢献したばかりでなく，現代都市における広場の開発と保全の方向を示唆するものであり，環境計画学上寄与するところが大きい。

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。